水無月（みなづき） 第688号

むなかた

目次

水無月【大島・中津宮】 3・2
氏子会総代総会 4
神社総代会研修会 4
企業研修を受入れ 4
神宮神宝より紐解く 5
神宝館だより 6
宗像大社歌会詠草 7
御造営奉賛者御芳名 7

よてす。「天孫を助け奉りて天孫に祭かれよ」これは、御親神であられます皇祖天照大神より宗像大神に下された神勅であり、皇室守護を本義とする宗像祭祀の根幹として、宗像三宮其々の拝殿に掲げられている▼宮中では、陛下御自らがお出ましになり、紀元祭や新嘗祭など年間二十にも及ぶ天皇親祭が行われている。古来より天皇の最も重要な務めは、祭祀を司る事にあり、第八十四代・順徳天皇は「およそ禁中の作法は、神事を先とし、他事を後にす」と示され、何よりも先ず、国の平安と国民の安寧を祈る事を念頭に、歴代天皇により受け継がれてきた。国民はその大御心に対し、感謝と敬愛の情を捧げてきた。皇室と国民の関係は互譲互助の精神で結ばれ、その君民相互関係を国体と呼び、宗像大社は国体を体現し、皇室護持の神社として存在する▼神道は「空間」の信仰だといわれる。宗像祭祀の中心を成す沖津宮では、私的な御祭（みまつ）りは許されず、神代以来連綿と公的祭祀が営まれ、宮中では万世一系の天皇が無私の御心で、国家・国民の安寧を祈り続けておられる。この二つの空間は、共に二千有余年の歴史を継承し、今現在も何ら変わる事なく存在している▼宮中祭祀と宗像祭祀は、表裏一体であり、そして共通の歴史的意義をもつ。（床）

宗像市大島

中津宮七夕祭

参道の北側に立つ牽牛神社
（彦星宮）

参道の南側に立つ織女神社
（七夕宮）

水無月（みなづき）【大島・中津宮】

水無月、現在の六月。漢字を素直に読めば「みずなしつき」、水の無い月である。六月は雨の多い時期、また、田植えなどをする、水に関わる月なのに、何故。と思われがちですが、水無月の「な」は、「の」にあたる連体助詞で、「水の月」という意味になる。諸説あるものの「水」に関わる月であることは間違いない。

水の月を象徴する大島・中津宮

宗像大社で水といえば「天の川」「天の真名井」…宗像市大島に鎮座する中津宮である。

中津宮の境内には天の川が流れ、この天の川を挟んで牽牛神社（彦星）と織女神社（織姫）が鎮座し、七夕伝説発祥の地とも言われている。当社に残る、七夕の記録を見ると鎌倉時代まで遡ることが出来る。現在は毎年八月七日（旧暦七月七日）の夜に島を挙げての七夕祭が行なわれている。

境内に流れる天の川を上流へたどれば、中津宮の御神水「天の真名井（あまのまない）」と呼ばれる延命招福の霊泉があり、名水が湧き出でている。当社の御神酒を醸造する勝屋酒造（宗像市赤間）では、この御神水を使用する日本酒もあり、この名水を求めて遠方より来訪される方もいるほどである。

また、この名水は諸芸上達の謂れもあり、それに因み毎年七月に書道大会「宗像大社中津宮七夕揮毫会」が行われている。昭和三十一年にはじまり、なんと今年

天の真名井（あまのまない）

七夕揮毫会

で六十三回目を迎える。幼稚園児から中学生までを対象に開催しているものであるが、教育、文化、未来を作る子供達の関わる事業も行なっている。

世界文化遺産登録後、中津宮の鎮座する大島も、観光客が増えている。渡島することが出来ない沖ノ島に近い場所である大島。島内にはこの沖ノ島を遙拝する沖津宮遙拝所、大島最高峰の御嶽山には中津宮の御祭神・湍津姫神の荒魂（あらみたま）を祀る御嶽神社がある。また、近年には世界遺産の価値を知るために設けられた交流館、子供でも安全に釣り体験ができる「うみんぐ大島」、大島の特産品などのおみやげを扱う店など、様々な目的で楽しめるよう、徐々に島内が活性化している。

木々が潤い、緑麗しい梅雨。海水浴で賑わう夏。宗像市神湊からフェリーで二十分。是非一度、大島へ。

中津宮七夕揮毫会開催概要詳細
http://www.munakata-taisha.or.jp

辺津宮境内の蛍

蛍が物語る宗像の自然

この時期、季節の風物詩でもある、蛍が中津宮にも出現する。農薬など環境の変化に非常に弱い蛍。中津宮、大島には良い自然環境が残っていることの現われでもある。因みにこの蛍、辺津宮・沖津宮、宗像大社の三宮全てに出現する。

鎮守の森とともに、自然と共存共栄してきた象徴である神社。環境破壊の進む昨今、先人達の紡いできた文化、自然環境を次の世代、未来へと残さなければならない。そう強く思わせる水無月、この時期に現れる蛍である。

氏子会総代総会

五月二十五日、宗像・福津市内、各地区の総代、評議員ら九十名が当社清明殿に参集、平成三十年度の氏子会総代総会を開催した。総会では昨年度の事業報告、決算報告、本年度の事業計画案、予算案につき審議・承認され、この総代総会をもって、本年度の宗像大社氏子会が動き出した。神社の聖なる部分を支えている氏子。その組織は神社により大小あれど、神社が地元の方々に支えられ成り立っていることを忘れてはいけない。

福岡県神社庁宗像支部神社総代会研修会

五月二十四日　福岡県神社庁宗像支部神社総代会研修会（会長：松崎芳勝）として宗像大社を巡拝する研修会が参加者五十二名を得て開催された。

これは例年日帰り研修会として開催されており隣県神社を参拝するものであったが、本年は総代としての研鑽を積むために昨年、世界文化遺産に登録された宗像大社と神宮大麻の頒布意義について学んだ。

一行は筑前大島に渡島、先ず沖津宮遥拝所より沖津宮を参拝、近年拝する事が難しい沖ノ島を今回は微かに拝する事が出来、一同感激のまま中津宮、辺津宮を正式参拝し、宗像三宮の巡拝を終えた。

その後、本研修の主となる葦津宮司の講演が行われ、皇室・神宮そして宗像の未来について語られると、一同本研修の目的を達成した面持ちで各々の地域への帰路についた。

企業研修を受入れ

第四回　㈱トヨタプロダクション
エンジニアリング新入社員研修
五月二十一～二十三日　新入社員十四名参加

第二十三回　出光興産㈱中堅社員研修
五月二十九～六月一日
中堅社員四十三名参加

当社辺津宮で行なわれる本研修、白衣の着付けからはじまり、期間中は白衣・白袴で研修を受け、神職の行なう作法を覚え、境内清掃、宗像市神湊の浜辺で禊、夜間は高宮での鎮魂行事、神職との討議などを行なっている。

研修生は日頃と全く違う環境に戸惑いながらも、神社で研修する意義を各人が考え、懸命に取り組んでいた。研修生にはこの研修で得たものを持ち帰り、それぞれの会社での更なる活躍を期待したい。

神宮神宝より紐解く 7

元神宮式年造営庁技師　釆野　武朗

装束神宝の素材

装束神宝調製の造形基準となる仕様書には、技法や寸法の規定のほかに各品目、又その各部位に用いる素材についても詳細な規定があります。この規定に基づいた素材を用いて少なくとも昭和四年の第五十八回以降、各二十年毎の遷宮において御料となる装束神宝が調製され続けてまいりましたが、時代の流れと共に素材の確保、とりわけ仕様基準に準拠した素材を調達することが回を追うごとに厳しい状況に追いやられています。装束神宝は工芸的にも広範な技術が幾重にも複合し、また使用されてひとつの御料の形態が形成されていきますが、技術が広範に及ぶに比例してそこで使用する素材も多岐に亘ってまいります。

その一つの例として先の第六十二回の御料の調製に必要とされた素材と種類を次に記します。

金属八種
金、銀、銅、黄銅、鉄、玉鋼、錫、白鑞

植物十六種
朴、椎、桜、檜、藤、黒柿、白樺、黄楊、水目桜、白楊、真竹、箭竹、蒲、菅、葛、藁

宝玉六種
水晶、瑪瑙、瑠璃、琥珀、真珠、硝子

鳥羽三種
鶺羽、白鳥羽、烏羽

皮革三種
鹿、牛、熊

角二種
鹿角、水牛角

となり、その他御料調製の中で多数の品目の各部位において、その目的に応じた用途で使用される塗の素材としての漆が約二六〇瓩必要となりますが、これらも国産で尚且つ純度の高い優良な品質のものに限られています。

以上前に挙げました一連のこれらの素材も代表的なもので決して全てではありませんが、これらの材料を各一回の遷宮における装束神宝の調製素材として取り揃え、必要とされる高度な技術が加えられ造形の工程が取り進められていくのですが、先にも触れましたように、単に一種目の素材の調達のみでは装束神宝の御料調製素材としての条件を満たさないところに調製用務の難しさがあります。

また必要とする素材が仮に調ったとしても、素材の品質に関して仕様規格に適合した等級でなければ装束神宝の材料としては成立し得ないのであり、この素材における品質の関門を超える事が麗しい御料を調製できるか否かの大きな成否の鍵となります。加えてその材料の産地、素性、採取の方法が清浄である事も御料素材として重きを置くところで、これらの全ての要求を満たし得て漸く調製の着手に臨みます。

檜材の検査を行う
造営庁当時の筆者

神宝館だより14
八万点ノ国宝収蔵

八条院庁下文（はちじょういんのちょうくだしぶみ）

永万元年（一一六五）六月二十九日

宗像大社所蔵古文書のなかの最古の文書で、内容は宗像朝臣氏実（うじざね）を宗像大社の大宮司に任ずるというものである。指出人の八条院とは、鳥羽天皇皇女暲子（しょうし）内親王。釈迦の誕生と同日の四月八日に生まれたことで祝福を受け、父鳥羽天皇、母皇后にも深く愛されたという。

この文書が教えてくれる数々の歴史的事実を挙げよう。

1. 平安時代から全国に広がった私有地制度である庄園が、宗像大社の社領内にも存在した。
2. 宗像大社の社領内の庄園は、皇室が領有する皇室領庄園であった。
3. 律令国家が任命していた宗像大社の大宮司は、庄園制度の下では庄園領主が任命するように変化していた。
4. 八条院家は、「庁」と称する家政機関によって取り仕切られていた。
5. 八条院家の庁のトップは、太政大臣従一位という高官に就いていた花山院忠雅（かざんいんただまさ）であった。
6. 永万元年当時の大宮司は、宗像氏実であった。

八条院は、三十年後の建久五年（一一九四）にも宗像大社大宮司に氏実の息子である氏国を任命しており、この命令文書も当社に現存している。氏国は、父親の氏実の供養のために南宋に阿弥陀経石を発注した大宮司である。これからも様々な史料・資料をひもとき、紡ぎなおして歴史をのぞき見てみよう。（河）

八条院庁下文

菊の全国大会を宗像市で開催
十一月に向け実行委員会設立

本年、十一月十日（土）・十一日（日）の二日間、宗像ユリックスでの開催が予定される、菊の全国大会、「第五十四回一般社団法人全日本菊花連盟全国大会宗像大会」に向け、四月二十五日、宗像大会実行委員会が設立された。宗像市・宗像大社菊花会が中心となるこの実行委員会が来たる十一月に向け、諸準備を進めて行く。

本大会は全国の菊花愛好者が丹精こめた作品の優雅さを競い、菊づくりの普及と栽培技術の向上、観光産業の発展を図る目的で、全国各地を持ち回りで開催されている。

第682回　宗像大社歌会詠草　■大西晶子選　■毎月25日〆切

麦の穂のさみどりに伸ぶ広き田を擦れ違ひ飛ぶ若きつばめら　佐々木和彦
瑞々しい麦畑の景。語順を変え〈さみどりの麦の穂のびる広畑を〉としては。

木芽味噌ガゼ味噌二種の菱餅を供えた祖母の故郷ははるか　早川　祥三
ガゼは海胆。菱餅にそのような味噌を入れる地名を入れ、結句〈故郷は壱岐〉などと。

さぁみなさん惜春会をやりますとライトグリーンの案内状(カード)が来たよ　山﨑　公俊
晩春の野も山も緑が美しい。童話の世界の主人公のように木々から届く招待状が楽しい。

ホテルより遠くに見ゆる桜島風の吹きよで煙西東(けむりにしひがし)　秋吉　嘉範
風向きで変わる桜島の煙に注目した作者。〈ホテルから見る桜島噴煙は吹く風により西に東に〉。

三階の窓のむかうに桜見ゆ車椅子押し母を窓辺に　北野カズミ
母に美しい桜を見せたかった作者。三句以降を〈咲く桜見せたく母の車椅子押す〉と。

公園の枯れはじめたる松の木はザワザワ音たて樹医に呼びかく　萩原　勉
擬人化が面白い。二句は具体的に〈葉の色あかき〉など。結句〈樹医に訴う〉。

桜咲く朝に双子の孫共に学舎の地鹿児島へ発つ　森　龍子
桜と旅立ちが新入生を思わせる。二、三句〈あした双子の孫ともに〉。表記を仮名で柔らかく。

日光で聞きしは杏かねむり猫甚五郎煎餅しみじみと食む　山本　静子
若い日に見た眠り猫を思う作者。二～四句〈見たるは杏か眠り猫の〉としてはいかが。

ようやくに葉をひろげたる三本のブロッコリーにひよどりが鳴く　吉﨑美沙子
大切に育てたブロッコリーを狙う鵯。三本は言わず〈プランターの〉などと景を入れては。

新しき高校生ら陸続とつらなる道にわがあゆみ入る　池浦千鶴子
高校生の登校時間の通学路だろう。初句は新しきでは分かり難いので〈新学期の〉と。

争いの空き地に桜舞い降りてピンクの涙来世に誘(いざ)なう　本田エリナ
散る桜を涙に喩えた歌。単純化し〈争いの種の空き地に桜散るピンクの涙こぼれるように〉。

◆選者詠

てのひらにとまる蛍の明滅を
知らずしらずに息あはせ見る

良き運を約するやうにきらめけり
夜の国道のパチンコ店の灯

第653回　俳句

飛梅も言語の色に芽を落す　早川　祥三

御造営奉賛者御芳名（平成三十年四月）（順不同・敬称略）

一五、〇〇〇円

杉並区　東京渋谷ライオンズクラブ

一〇、〇〇〇円

昭島市　矢幡　勝利
大分市　南　徳行
京都市　知岾芙瑠弥
豊島区　長山直弘・恭子
町田市　小野美智子・好正・有紀・佳也
目黒区　山元舞優子

六、〇〇〇円

横浜市　関　武洋・祥江・雄太

五、〇〇〇円

和泉市　檜垣　寿博
大川市　古賀　七恵
鹿児島市　草野　恵子
橿原市　正田　公寛
金沢市　藤田戦略研究会
北九州市　樋口俊文・純子
熊本市　村上　絹子
品川区　吉武　啓道
新宿区　沖田　英久
瀬戸市　松原　早苗
高松市　玉田
鳥栖市　立ち飲み焼肉バル　騎驢覓驢
鳥取市　坂口　利彦
名古屋市　白木良彦・裕美子
西尾市　西崎　龍馬
寝屋川市　木村　隆之
福津市　藤井　正史
富士宮市　髙田　昌子
箕面市　山田　和裕

宗像市　大渕　藍
宗像市　吉田　一直
八千代市　冨岡　信一

四、〇〇〇円

茅ヶ崎市　清水芳江・海乃

三、〇〇〇円

大阪市　福地　昭義
熊本市　服部　大輔
富士宮市　渡邉　俊一
大阪市　片山　正一
鹿児島市　吉満　恵子
潟上市　西村　伸平
川辺郡　横山実千代
北九州市　嶋谷　悦子
久留米市　梅田　絹代
宮崎市　宮崎千恵子
世田谷区　傳田　京子
太宰府市　塚原　亜紀
長崎市　菅　規子
長崎市　岩永　椋祐
福岡市　後藤　忠彦
福岡市　平田　勤
福岡市　讃井　隆史
富士宮市　渡邉佐代子
宗像市　西村　勇一
目黒区　定正　孝治
横浜市　広川　好正
横浜市　八釼　清子
横浜市　八釼善理子

6月 まつりごよみ

1日	総社月次祭	午前11時
	引続き 高宮祭	
	第二宮第三宮祭	
	宗像護国神社祭	
15日	総社月次祭	午前11時
	引続き 高宮祭	
	第二宮第三宮祭	

編集後記

またこの季節がやってくる▼夏の甲子園と同じ時期に開催される、東西神社人野球大会。年に一度全国六チームの神職らが集い、白球を追う。まさに神々の甲子園と言える▼その大会に向け、本格的に練習が始まった。練習期間は約三ヶ月間。神社での奉仕終了後、練習を行っている▼当社は太宰府天満宮との合同チームで短い練習期間の中でチーム力を高めていく。他のチームに負けない「結束力」これがチームの武器である▼昨年は大会に参加して初めて最下位に終わり、悔しい思いをした▼悔しさを胸に本年は、優勝旗を福岡の地へ持ち帰る。（黒）

宗像大社

2018年6月1日発行(月刊)／宗像大社 〒811—3505 福岡県宗像市田島2331 電話(0940)62—1311(代) http://www.munakata-taisha.or.jp/